



# エネルギー開発の原動力 ——イランのナショナリズム

(一社) 現代イスラム研究センター

理事長 宮田 律

イランのエネルギー開発が欧米諸国によって問題視され、イランは米国を中心とする経済制裁によって経済的苦境に置かれている。イランの通貨リアルは下落し、実質50%の上昇とも見られるインフレを招き、さらに失業率も昂進し続けている。それでもなおイランが核エネルギー開発にこだわり続ける背景の一つにはイランのナショナリズム（民族意識）があるように思われる。イランは中東、さらにはユーラシアで先進文明を築いてきた。周辺のアラブ諸国に先んじて核エネルギーを開発、本格的に実用化させることはイラン人たちのナショナリズムをくすぐるものであるに違いない。以下では、イランのナショナリズムが歴史的にいかんかに発展してきたか、またそのナショナリズムを構成する要素を考えることによって、イランの核問題の一断面を検討したいと思う。

### イラン民族の起源

イラン人が自らの国を「イラン（アーリア〔高貴な人々〕人の国）」と呼んでいるように、イラン人には特別な民族的プライドがある。イラン人の言語であるペルシア語はインド・アーリア語族に属し、言語は民族の最も基本的性格をなしている。

イラン民族に独特のプライドを与えることになったのは、アケメネス朝時代の文化であり、この王朝の下で先進的文化を発展させたことは

イラン人がユーラシアにおいて卓越した民族であることを示すことにもなった。イラン人のキュロスは、紀元前533年にメデス人に対して反乱を起こして国王となった。彼は、最初のイラン大帝国を建設したが、これがアケメネス朝である。アケメネス朝のダリウス1世は、アケメネス朝を世界帝国として発展させ、有効な統治・行政システムを確立した。

さらに、3世紀に創始されたサーサーン朝は、イラン人の大帝国としてアケメネス朝を継いだ。このサーサーン朝時代に現代ペルシア語の原型ができて上がる。創設者のアルダシール1世は、224年にパルティアに対して勝利を収めてサーサーン朝を興した。サーサーン朝末期にはホスロー1世（531～579年）が統治し、エフタル族討伐で国威を示すとともに内においては公正な政治を実現し、また地租制度の確立、灌漑、農業に力を注いで、サーサーン朝の最盛期を現出した。

### アラブ・イスラームによっても消滅することがなかったイラン文化

イランが周辺のアラブ諸国に対して誇りを失わないのは、アラブ・イスラームに征服されても、その文化的伝統を喪失しなかったことがある。622年にイスラームが預言者ムハンマドによって成立すると、またたく間にイスラームの旗の下にアラブ人たちはイランに攻め入ってき

た。637年、アラブ・ムスリムとの「カーディスイーヤの戦い」によってサーサーン朝が滅亡し、アラブの征服が行われると、ペルシア語にもアラビア語の語彙が入るようになり、アラビア文字が使用されるようになる。ペルシア語はおよそ300年間イラン人の公的な生活から姿を消した。アラブのイラン支配は、およそ600年間続いたが、しかしイラン文化はアラブのそれに呑み込まれることは決してなかった。

10世紀になると、シュウビーヤ運動（アッバース朝初期の8世紀から9世紀にかけ、アラブと非アラブとの平等を主張したイスラームの文化運動）の結果として、イラン人たちはイスラームの信仰をもちながらも、ペルシア語を使用するようになっていた。行政用語や歴史的著作、また神学などはアラビア語で書かれたが、詩は圧倒的にペルシア語で著された。

10世紀になると、イラン人たちは、アラブ・イスラーム文化の下にありながらも、ペルシア語で筆記するようになる。その背景には、イラン人たちがフィルダウスイー（934～1025年）の『シャー・ナーメ（王書）』などを通じて自らの過去をふり返っただけでなく、『シャー・ナーメ』で使われたペルシア語は共通語としてイラン人の間に浸透したことがある。フェルドゥスイーの『シャー・ナーメ』は、イラン人のイスラーム以前の歴史について触れているばかりか、「新ペルシア語」の基礎となり、標準的なペルシア語の出現をもたらした。

初期イスラーム時代においてアラブによって征服されながらも、ペルシア語という自らの言語を喪失しなかった民族はイラン人だけである。それほど、イラン人には自らの言語や文化に対するプライドが強かった。当初、イラン人の文学者たちはアラビア語で作品を著し、アラブ文学の発達に寄与していたが、しかしアッバース朝の中央政府の権威が低下すると、各地でイラン系王朝が誕生するようになり、それに

---

#### 筆者紹介

1955年山梨県甲府市生まれ。慶應義塾大学大学院文学研究科、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校（University of California, Los Angeles）大学院修了。現代中東論、現代イスラーム研究専攻。一般社団法人「現代イスラーム研究センター」理事長。静岡県立大学国際関係学部准教授。著書に『中東危機のなかの日本外交』（NHKブックス）、『紛争の世界地図』（日経プレミア）、『南アジア 世界暴力の震源地』（光文社新書）、『イスラーム世界おもしろ見聞録』（朝日新聞出版社）、『中東イスラーム民族史』（中公新書）、『現代イスラームの潮流』（集英社新書）など。

---

伴ってペルシア語による文学も復活するようになった。また、イラン人の文学者たちは、優雅さ、感情的な優しさ、生き生きとした情感をアラブ文学に吹き込み、また自らの文学も発展させ、世界でも特筆すべき文学となっていく。

#### トルコ人にも影響を与えたイラン文化

イラン文明に影響を受けたのは、アラブだけではなく、現代の中東を構成する主要な民族であるトルコ人もまた同様だった。トルコ系のガズナ朝（977～1187年）は、アフガニスタン東部の町ガズナを首都とした王朝で、イラン東部のホラーサーン、インド北部などを支配した。

イラン文化の復興は、このガズナ朝にも影響を与え、この王朝もまたイラン化していくことになった。先にも述べたように、ペルシア語はイスラームの文化言語となっていた。さらに11世紀にはやはりトルコ系のセルジューク朝（1038～1194年）が成立する。この王朝は、10世紀後半に、イスラームに改宗したトルコ系のオグズ・トゥルクマーン族のセルジューク家が現在のイラン、イラク、トルクメニスタンに樹立した王朝だが、このセルジューク朝も、ガズナ朝と同様に、イラン文化の影響を受けて、ペルシア語は教育のある階層の言語となり、また日常生活でも次第に用いられるようになっていく。

ペルシア語は、セルジューク朝のトルコ人た

ちによって、イラン高原を越えて普及していった。セルジューク朝時代のイラン文化の普及に貢献したのは、セルジューク朝第三代のスルタン、マリク・シャー（在位1072～92年）に仕えたイラン人の宰相（ワズィール）であったニザームムルク（1018～92年）だった。彼は、イクターという封土制度を整備し、軍事力の充実を図った。さらに、セルジューク朝支配下の各地にニザーミーヤ学院というマドラサ（神学校）を設立して、イスラーム神学の研究・教育を発展させた。イラン人のニザームムルクこそがセルジューク朝をイスラーム世界において文化的、また軍事的に強力な勢力に仕立てていった人物であった。

#### シーア派の採用によって強まったイランの民族性

1501年にイスマーイールは、サファヴィー朝を創設し、自らをイスマーイール1世と名乗った。イスマーイール1世は、シーア派イスラームを採用することで、オスマン帝国との相違を際立たせようとし、サファヴィー朝は、スンナ派を奉ずるオスマン帝国とイスラーム世界の政治的統一を分かつことになった。

サファヴィー朝がシーア派イスラームを国教としたことは、強い民族的アイデンティティーと、スンナ派のオスマン帝国に対するライバル意識をイラン人に植えつけることになった。サファヴィー朝とオスマン帝国、双方ともイラク地方と北部湾岸地域という「領土」をめぐる覇を競ったが、シーア派の聖地、寺院が多く存在するこれら地域は、宗教上の理由からもイランの王朝にとっては重大な関心の対象となったのである。

サファヴィー朝時代に採用されたイランのシーア派は、一二イマーム派という宗派である。一二イマーム派は、シーア派が正統なムハンマドの後継者（＝イマーム）と考えるアリーから

数えて一二代目のイマームがその幼少の時に行方不明になったが、それを一二イマーム派では「神隠れ（＝ガイバ）」状態になったと考える。そしてこの「神隠れイマーム」が信徒の苦難の時代に正義や平等をもたらすために、「救世主（＝マフディ）」となって再臨するというのが、一二イマーム派の基本的教義である。

シーア派は、イスラーム成立後5世紀の間イスラーム世界で一つの勢力として活動し、その後衰退する傾向にあったが、サファヴィー朝による国教としての採用以来、イランでは国家の宗教としての地位を確立する。他方、アラブ世界ではシーア派は政治・宗教・社会を支配するような宗派とはなりえぬまま現在に至っている。

#### 傷つけられたイラン人のプライドと日露戦争

イランの民族的プライドを傷つけたのはガージャール朝で、この王朝の下でイランは多くの領土を失った。カージャール朝は、遊牧部族を連合させたものであったが、中央集権的な権威の創設に成功して成立した。19世紀初頭になると、ヨーロッパの大国であるイギリスとロシアがイランに進出するようになる。イギリスは、自らの植民地である「インドへの道」を確保することを目指し、その経路にあるイランの重要性を認識するようになった。

ロシアも、イラン領の獲得を目指してイランへの軍事的進出を行った。ガージャール朝はロシアとの戦争に敗北し、1812年のゴレスターン条約、また1828年のトルコマンチャーイ条約で、アラス川より北の領土をすべて失った。

さらに、ロシアはガージャール朝に中央アジアへの領土的要求を放棄するよう圧力をかけ、他方イギリスは二度にわたってイランに軍隊を上陸させ、イランがサファヴィー朝の崩壊以降、喪失していたアフガニスタン西部のヘラートを放棄するよう促した。1857年のパリ条約によっ

て、カージャール朝はイギリスの主張を受け入れ、ヘラートと、現在はアフガニスタンになっている当時のイラン領に対する要求を取り下げることになった。

ヨーロッパ植民地主義の進出を受ける中で、1905年にはカージャール朝の専制支配と帝国主義の進出に対して、憲法によって体制を強化しようとする立憲運動が起こった。その起爆剤となったのは日露戦争（1904年～05年）における日本の勝利であった。イランを苦しめる帝国主義国のロシアにアジアの小国の日本が勝ったことはイラン人には驚愕をもって受け止められ、彼らの民族意識を大いに刺激した。明治憲法をもった日本が憲法をもたないロシアに勝利したことによって、イラン人たちは憲法の制定こそが体制を強化できる手段と考えるようになった。

#### 「イラン民族の栄光」に訴えたパフラヴィー朝

1925年にパフラヴィー朝を創設したレザー・シャーは、イランを「先進国」に仕立てようとし、自国へのプライドを国民にもたせることを考えた。国民にイスラーム以前のイランの歴史を振り返らせ、キュロス、ダリウス、クセルクスなどのアケメネス朝の王たち、またサーサーン朝のシャープール大王の栄光などを国民に強く意識させようとした。レザー・シャーのイランの偉大な過去に回帰しようとする姿勢は、ペルセポリスやスサなど古代遺跡を頻繁に訪れたこと、またテヘランに考古学博物館を建設したことや、さらに国立遺跡協会の創設したことなどに強く見られた。

また、1935年にレザー・シャーは、国名をペルシアからイランに変えた。レザー・シャーによれば、ペルシアという名前はギリシアや、他の古典的文学者たちが、付けた名前である。アケメネス朝のキュロス大王やダリウス大王の時にはイランという名称が使われていた。こうし

た古代におけるイラン帝国の栄光への回帰は、レザー・シャーの絶対的君主制を強化するためにも必要だった。彼は、聖職者（ウラマー）の影響力を弱めるために、社会におけるイスラームの役割を低下させることを考えていく。イスラームは彼が考えるイラン・ナショナリズムとは相いれなかった。

レザー・シャーによるイランの復古主義が台頭した背景には、パフラヴィー朝に先行するカージャール朝が諸外国の進出を受け、イランが半植民地化し、イラン人の民族的自尊心を大きく傷つけたことにも関係している。レザー・シャーは王位に就くと、イランを近代化するとともに、イスラーム以前の神聖国家に仕立て上げることを考えた。

#### 石油国有化運動と国王の独裁的民族主義

イランの石油産業はその発見以来、イギリスの企業が採掘や輸出までコントロールしていた。イランの民族主義政党である「国民戦線」が1950年代初頭にイランでは最も影響力のある政党となっていった。国民戦線を指導したのは、民族主義者のモハンマド・モサッデク（1880～1967年）だった。国民戦線は国内政治では民主化を求め、国王の権力の抑制を求め、またイランの石油産業に対するイギリス支配を終わらせることを訴えた。この時期、イランの民族主義の指導者たちは、イギリスに対する民族運動を高揚させるために、石油資源の国有化を考えていった。当時イランの石油は1トンあたり1.20ドルであったのに対し、第二次世界大戦後、米国で生産される石油は同じ単位で12.45ドルで、イランの経済的不利益は明らかだった。

モサッデクは1951年4月に首相になると、5月にイギリスが所有していた石油産業を接收し、国有化を宣言した。戦後イランのナショナリズムが最も高揚した時期である。米国に石油問題の調停役を求めたモサッデクであったが、

米国のアイゼンハワー政権は、モサッデクのトゥーデ党（共産党）に対する寛容な姿勢に危機感を感じ、モサッデク政権の打倒を決断する。1953年8月19日、米国のCIAとイギリスの特務機関が後押しする国王支持派のクーデターが発生し、モサッデク政権は崩壊する。この米国のイラン政治への介入はイラン人の米国への意識を曇らせることになった。ある意味では米国の介入はイラン人の排外的なナショナリズムに火をつけることになった。

米国が支援したクーデターによってパフラヴィー朝二代目国王モハンマド・レザー・シャーの独裁体制への道が開かれることになった。国王体制下のイランは、中東で米国の利益を代弁することになり、米国が売却した兵器で中東でも有数の軍事力を築き上げ、「湾岸の警察」として米国が考える中東秩序の構築に手を貸し、ソ連の共産主義の影響力の浸透に対する防波堤の役割を担うようになる。

モハンマド・レザー・シャーは、父親のレザー・シャーのように、イランの民族主義に訴えるようになり、イランの王たちの栄光を強調するようになっていった。1971年秋、モハンマド・レザー・シャーは、イラン建国2500年祭をペルセポリスで開き、自らがアケメネス朝のキュロス大王の後継者であることを内外に訴えた。彼にとってはこの建国祭はイランのナショナリズムのシンボルであった。この式典には5,000万ドルから3億ドルかかったと見られている。しかし、こうした贅沢が国民の不興をかったことは明らかで、実際この式典にはイランのごく一部の上層階級だけが参加した。

1970年代を通じてイランはモハンマド・レザー・シャーに対する個人的崇拝がいっそう強制され、彼はアケメネス朝やサーサーン朝の王のように、神聖な権威をもつとまで言い切るようになった。モハンマド・レザー・シャーは、イランの「偉大な文明」の復活を考えるように

なり、欧米、特に米国モデルの近代化や国力の増強を追求していった。

しかし、米国の支援を受けるモハンマド・レザー・シャーの近代化は、独裁政治とともに、イスラームの平等や公正の概念に反するものであったために、多くの国民の不評を買い、イランでは、1979年2月にイランの民族主義よりもイスラームの普遍性を強調するイスラーム共和国体制が成立した。

### イラン・イスラーム共和国におけるナショナリズムの復活

イラン革命の指導者であるホメイニ師は、民族の優越性、君主制への礼賛、イスラーム以前のイラン文化の栄光を過度に強調するなどの点で、イランのナショナリズムへの傾倒に強く反対した。ホメイニ師がナショナリズムを否定したのは、それが人々のイスラームへの信仰や信頼を希薄にし、イスラーム共和国のイデオロギーや、革命以来のイランのイスラーム的社会的規範を損なうと考えたからだ。革命の指導者であるホメイニ師は「革命の輸出」を唱えたが、しかしイスラームの少数派であるシーア派を奉ずるイランのイスラーム革命輸出には限界があった。

また、1980年にサダム・フセインのイラクがイランに侵攻して、イラン・イラク戦争が始まり、湾岸のアラブ諸国などがイラクを支援するようになると、イランは再びその民族主義に訴えるようになっていく。ノウルーズやそれに伴うイランの伝統的行事が次第に復活してさらに盛んになっていった。また、アケメネス朝の葬祭殿であったペルセポリスの修復も国策として行われるようになった。

また、イスラーム共和国が現在のように、社会・経済的問題を克服できない中で、体制のイデオロギーであるイスラーム主義への国民の信頼が薄らいだことも確かである。イランでは、

古代から高度な文明を発展させたイラン民族の「栄光」や「繁栄」を取り戻すことを考えるナショナリズムが再び台頭するようになった。繰り返すが、イラン人はアラブに征服され、イスラーム化したとはいえ、独自の民族文化を保持して、それをさらに発展させたり、またその文化で周辺の民族に影響を及ぼしてきたりした。

2010年3月21日のノウルーズの際には、ペルシア文化の伝統を共有し、ノウルーズの習慣があるイラク、アフガニスタン、タジキスタン、トルクメニスタンの大統領がイランに招かれ、祝賀の行事が催された。この祝賀では世界で3億の人々が共有するペルシア文化の一体性が強調され、ハメネイ最高指導者やアフマディネジャード大統領も出席し、世界の平和と協力を推進するために、ノウルーズがいかに重要である

かが訴えられた。

核問題に関する対外的な危機の創出はイラン・イスラーム共和国体制が国民を引き締める上でも必要なことである。アフマディネジャード政権は「反米・反イスラエル」のナショナリズムや「被抑圧者の救済」など革命の精神に立ち返ることによって、イスラーム共和国体制下で生まれた矛盾を克服しようとしている。ホメイニ師時代のイランがそうであったように、国民の体制への求心力を維持するために、イランのナショナリズムが強調され、このナショナリズムがアメリカやイスラエルとの対立を招いて国際社会の重大な緊張要因となり、またトルコやアラブなど周辺諸国にとっても警戒される要因となっていくに違いない。